

イースター説教「未来に心を開け」

エゼキエル書 37章 11～14節、ルカによる福音書 24章 1～32節（口語訳聖書）

1973.4.22

日本バプテスト同盟 関東学院教会

イースターは、クリスマスとともに、教会にとってなくてはならない大切な祭りであります。どういう意味で重要な祭りであるかを皆様とご一緒に学んで、祭りの喜びを分かち合いたいと思います。

イエス・キリストの福音書はイエスの十字架の死で終わったのではなく、ルカ 24 章が示すように、イエスの墓からの^{よみがえ}甦りの出来事によって初めて完結します。福音書はイエスの誕生に始まり、イエスの甦りをもって締め括られています。しかし、福音書の著者の立場からすれば、歴史の順序はちょうど逆でありました。なぜなら、イエスの甦りに出会った弟子たちはその復活信仰に立って初めて、福音書を書きえたからであります。福音書は、したがって、初めからでなく後ろから、結論から書かれて初めのほうへと及んだのであります。

まず、この歴史的事情が示すように、キリスト教の信仰にとって、甦りはまさしく扇の要であります。イエスと共に生活していたときには、弟子たちはイエスの教えと行動がよく分からなかった。それが、イエスの甦りに出会って初めて、イエスの言葉と業のすべてを明らかに知るようになったのです。復活信仰は、キリスト教の信仰がそれとともに立ちもし倒れもするものとなりました。信仰の試金石であります。と同時に、イエスの甦りが信仰にとって大変重要な事柄であればあるだけ、それだけまた、この甦りをどう捉えればよいのか、どう理解したらよいのか問題になります。どう解釈したらよいのか分からないような難問題であります。しかし、難しいからといって、これにぶつかることを避けるならば、福音は真の力を失ってしまいます。福音書が伝える甦りの記事と真正面に取り組むほかありません。

ガリラヤからイエスに従ってきた女たちは、イエスが十字架につけられ、息絶えるのを遠くから見ました。そして、イエスの亡骸が墓に納められるのを見届けました。けれども、翌日が安息日のため、その日は外に出歩くのをやめて休み、3日目に、すなわち週の初めの日、週の第1日に墓に向かいます。彼らはそのようにして、日曜日の朝、いまだ夜も明けぬさきに、イエスをせめて丁重に葬ろうと、香料と香油を携えて墓に行ったのでした。しかし、墓にイエスの亡骸はなかった。そして、女たちの探している方はここにはいない、甦ったのだ、という天使のお告げを聞いたのです（ルカ 24：6）。イエスは墓からどんなふう^なに甦ったのか。この甦りの現象をどう証明するのか。こうした

問いを、誰もがここで一度は発することでしょう。しかし、誰も答えることはできません。私にもできません。女たちが墓に行ってみたときには、事はすでに起こった後だったのです。誰も見た人はいません。見た人がいれば、聖書はそれを記したでありましょう。天使は女たちにこう言います。「あなたがたは、なぜ生きた方を死人の中にたずねているのか」（同 5）と。女たちは、死んだイエスの体に香料を塗って葬ろうとやってきたのです。ですから、死人の中にイエスをたずねても無益であるという天使の言葉に驚き、慌てたのです。イエスはもう、女たちの手の届かないところに行ってしまいました。墓の入り口に立つ者は、墓の向こう側のことを把握することができません。死という厚い壁を越えることができません。墓の入り口に虚しく立つ女たちは、ちょうど、イエスの甦りの現象をどう証明しようかと思案する我々現代人のようであります。

女たちに与えられたのは甦りの現象の証明ではなく、「ここにはいない。よみがえったのだ！」という全く思いもよらない宣言であり、報知でありました。甦りというのは、人間の側からのどんな証明や論証をもってしても歯が立たない出来事です。もしも甦りを納得いくように論証できたとすれば、その瞬間に、甦りを否定する論証も成り立つこととなります。人間の論証によって肯定したり否定したりするそのようなことを、人はどうして本気で信ずることができるのでしょうか。それは愚かなことと言わなければなりません。

では、甦りということはどう捉えたらよいのでしょうか。それを論証することが虚しいことであるとするならば、論証しようとすることを断念して、この全く信じられないことを信ずるほかありません。否、信じられないからこそ、信じるのだ。古代のある教父が言いましたように、不合理なるがゆえに信ずるのです。理に合っているものは信ずるに足りません。キリスト教の信仰は、この矛盾を把握するところの信仰であります。

日本で数少ないクリスチャンの作家で、椎名 麟三しいな りんぞうという人がいます。ご存じの方が多いと思います。2 カ月ほど前に亡くなれましたが、この人の書いた『復活』へたどりつくまで」という一文があります。その中でこう言っています。「しかし、聖書における矛盾の極致は、何といてもキリストの復活であろう。十字架の死がほんとうの死ならば、“生きかえった”ということはありません。また、“生きかえった”ということがほんとうであるならば、十字架上の死はほんとうでなかったということになる」

この聖書における矛盾の極致をしっかりと把握することがキリスト教にとって最大の課題である、と私も思います。その意味で、椎名麟三の存在は日本のキリスト教信仰にとって貴重な存在であると言わなければなりません。

このイエスの甦りを把握するために大切なことは、女たちや弟子たちがイエスの甦りにどのように触れたかを注意深く見詰めることです。女たちはイエスが甦ったのだということを聞いたとき、(ル

カ 24 章) 8 節にありますように、イエスが時折言われていた言葉を思い出したのです。イエスは死んで女たちから去ったけれど、彼女たちの心に かつてイエスと共にあった記憶が生きていました。二人の弟子の場合も同様で、13 節以下にありますように、ふたりが悲しみに沈みながら エルサレムからエマオへと下っていく途中、見知らぬ人がふたりに語りかけ、道々聖書から キリストが苦難を受けて栄光に入るべきことを説き明かしました。そして、この人と食事を共にしていたとき、ふたりは この方が甦りのイエスであることを知るのです。気がついたときにはイエスは消えていたのですが、そのとき ふたりは、この方が道々聖書を説き明かしてくれたときに互いの心が内に燃えたのを思い出します (32)。イエスを思い出すとき、そのときまた、イエスが教えた聖書の言葉を思い出すのです。女たちや弟子たちはイエスと関わった思い出を手がかりとして、イエスが苦難を受けて死んで葬られ、そして甦るべきことが聖書に言われていること、したがってそれが神から出ていることを知るに至る。すなわち、神の御手の力によって イエスの上にすべてが起こったのだということに目が開かれるのであります。

では、イエスはどのように、モーセの書や預言者をはじめ 聖書の全体にわたって説き明かしたのでしょうか。それは、ここには書かれておりません。しかし、旧約聖書を読むとき、それを暗示する幾つかのものに出会います。人生の生き死にに関わる劇的な出来事が幾つか浮かび上がってきます。それを二、三、見てみましょう。

アブラハムは、ひとり子イサクを神にいけにえとして^{ささ}げよう命じられました。アブラハムはこれに服従し、ただちに イサクを伴って目的地に向かいました。この愛する子は神の約束の子でありましたから、神の命令はアブラハムにとって矛盾以外の何ものでもありませんでした。けれどもアブラハムは、神のストップがかかるその瞬間まで、イサクを本当に殺そうと思っていたのです。ヘブル書はこれを、適切にこう解説しています。「アブラハムは、神が死人の中から人をよみがえらせる力がある、と信じていたのである。だから彼は、いわば、イサクを生きかえして渡されたわけである」(ヘブル 11:19) と。イサクの^{ほうけん}奉獻は、死人を甦らせる神の力を暗示するものであります。しかも、アブラハムの信仰を通して それが起こっております。

また、エルサレムの首都が敵に包囲され、イスラエルの王国が滅ぼされたとき、人々は捕虜となって バビロンに連れてゆかれてしまいました。まさしく、イスラエルの死でありました。その折になされたエゼキエルの預言は、バビロンに繋がれたイスラエルを、神がいわば墓を開いて起き上がらせ、イスラエルに帰らせると言っています (エゼキエル 37:11～14)。そして、バビロンからのその解放がやがて現実となったのです。そのようにして、屈辱と奴隷とから、すなわち死から解放し、自由と救いと命と与える神の力を、イスラエルは歴史の中で経験したのでした。

イスラエルにおいて死から生へと、それが個人であれ団体であれ、劇的に転換する例はまだまだたくさん見出すことができます。甦りのイエスは聖書全体にわたって、それをご自分のことに関わら

せて説き明かされたのです。この旧約聖書の光に照らして見るとき、イエスの甦りはイスラエルの波乱の歴史に働いた生ける神の力の総決算であり、その収斂^{しゅうれん}したものとと言えます。モーセの律法と預言者と詩篇が、苦難を受けて栄光を受くべきキリストにおいて、すなわち その死と甦りにおいて成就したというのであります。

十字架上で無残にも敗北したと思われたイエスが、まさにその死において 死に打ち勝って勝利した。これは、人間の理性にとって 全く無茶な話であります。椎名麟三の言葉にあったように、本当に死んだのなら 生き返ることはありえないし、本当に生き返ったとすれば 十字架の死は本当ではなかったこととなります。この人間にとって絶対の矛盾は、しかしながら、神にとっては矛盾ではない。神にとっては、キリストは必ず苦難を受け、その栄光に入るはずであるのです。神の意志決定です。すなわち、本当に死んで、本当に生きる。これが神の真理であり、生ける神の力がそれをなしうるのであります。甦りをこのように捉えるとき、イエスがかつて弟子たちに与えた教えが初めて解けてきます。「自分の命を救おうと思う者はそれを失い、わたしのために自分の命を失う者は、それを見いだすであろう」（マタイ 16：25）

人間の生と死の絶対の矛盾における逆説の真理は、イエスの甦りを信じる信仰において 本当に真理となったのであります。

私たちは、この驚くべき真理の教えの前にたじろぐのを憶えます。しかし同時に、かつて経験したことのない新しいものへと イエスと共に進み出ることを促されます。甦りの真理の前に怖れて閉ざされた心が 同時に、新しい決断へと開かれるのを憶えるのであります。それは、墓場のこちら側に立つ者が墓場の向こうへと信仰的飛躍を遂げる決断です。主は甦り給うた。生きてい給う！ 夜明けのしじまを破る復活の知らせは眠れる心^{こころ}を呼び醒まし、死を前にして恐れる心^{こころ}を勇気づけ、そして閉じられた心に向かって「自己の未来を決定する第一歩を歩み出せ」と呼びかけてくるのであります。これに応えようとするとき、緊張と期待の喜びが息づいてきます。

日本におけるイースターの喜びはクリスマスほどには多くの人の心を捉えていないようです。しかし、クリスマスの信仰はイースターの信仰へと成長し、さらに練達し、ついには完成に至るべきものです。イースターを契機として、私たちの信仰は前進しなければなりません。パウロは、ペリピ 3 章 10～11 節でこう告白しています。「すなわち、キリストとその復活の力とを知り、その苦難にあずかって、その死のさまとひとしくなり、なんとかして死人のうちからの復活に達したいのである」と。私は京浜急行で通っていますが、運転手は発車のときいつも「出発進行！」と、自分に号令をかけています。復活信仰は、練達と完成に向かう絶えざる「出発進行！」であります。イースターは年に一度の喜びの祭りです。しかも また、主は週の初めの日・日曜日に甦られたので、その日曜日は主の甦りの日と、すなわち「主の日」と呼ばれるようになりました。ですから、毎日曜日、それが主の甦りの喜ばしい日であることを憶えて、力いっぱい神を賛美し、信仰より信仰へと進んでまいりま

しょう。

〔祈り〕

万物を創造し、^す統^{おさ}べ治め給う、全能の父なる神よ。

今日の復活祭の喜びの日を^{めぐ}巡り^{きた}来らせ、我らを共に主の喜びにお入れくださったことを感謝申し上げます。

甦りの主よ。

願わくは、我らを脅かす不安と恐れを取り除き、自分の内に閉じ籠もる心を主に向けさせ、未来へ向けて前進する信仰を与え給え。

今日より来週へ、今年よりさらに来年へと 甦りの主と共に喜びつつ前進し、信仰の練達・完成へと我らの歩みを進ませ給え。